

対談集

A・D・クックス

開高健

桑原武夫

E・O・ライシャワー

網野善彦

大岡信

李御寧

樋口陽一

東と西

司馬遼太郎

対談集

ADクソス

期高健

桑原武夫

EO・ラインキワ

網野善彦

大同信

第御掌

樋口陽一

東と西

司馬遼太郎

江苏工业学院图书馆
藏书章

対談集 東と西

一九九〇年十一月二〇日 第一刷発行

著 者 司馬遼太郎

発行者 木下 秀 男

発行所 朝日新聞社

〒104 11 東京都中央区築地五-1-1

電話 〇三-五四五-〇一三一

振替 東京〇一七三〇

編集・図書編集室 販売・出版販売部

印刷所 大日本印刷

製本所 青柳製本

ISBN4-02-256209-9 Printed in Japan 1990.

©R. Shiba, A. D. Coox, Y. Maki, T. Kuwabara,
H. Reischauer, Y. Amino, M. Ooka, L. O-Young,
Y. Higuchi

定価はカバーに表示してあります。

目次

ノモンハン、天皇、そして日本人——アルヴィン・D・クックス	5
モンゴル、「文明」と「文化」のいま——開高健	25
東と西の文明の出会い——桑原武夫	53
日本人物史談——エドウィン・O・ライシャワー	69
多様な中世像・日本像——網野善彦	153
中世歌謡の世界——大岡信	199
韓国、そして日本——李御寧	227
明治国家と平成の日本——樋口陽一	257

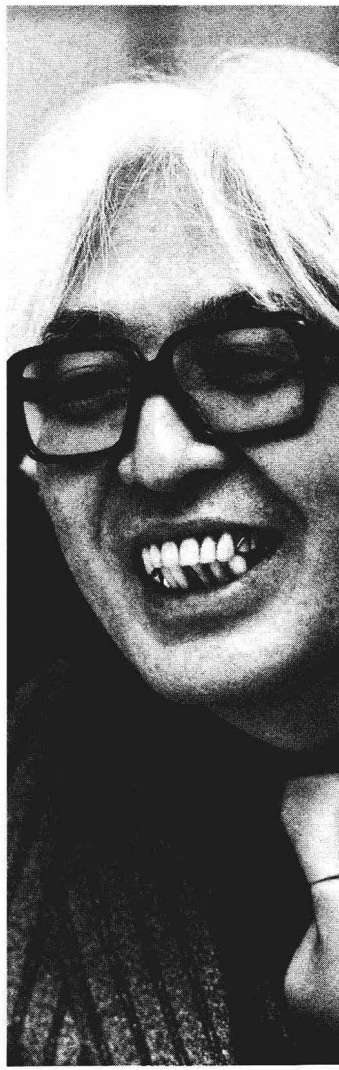
装帧
芦泽泰倬

対談集
東
と
西



ノモンハン、天皇、そして日本人

アルヴァイン・D・クックス



アルヴィン・D・クックス

一九二四年米・ニューヨーク州に
生まれる。戦史学者。サンディエ
ゴ州大教授、日本研究所所長。著
書『ノモンハン』（岩崎俊夫ほか
訳）が朝日新聞社より出ている。

古くて新しい事件

司馬 ノモンハン事件は古くていつも新しいですね。すでに日本人の骨髓の中の病巣になって眠っているように思います。気づかぬ人にはなんでもないが、気づく人にだけ痛みを発信します。私は五十代の十年間、この事件を調べることに熱中しましたが、いまは嫌気がさして資料を大きな袋に入れてホコリをかぶらせてあります。が今度、労作『ノモンハン』を読んで、書くよりも読者の側に回ってよかったと思いました。いい本でした。

クックス アメリカではノモンハンなんてだれも知らなかった。資料はまったくない。ノモンハンとは川の名前か、もっとひどい場合には、だれのことかという人もいたんです。

司馬 ノモンハンは一九三九年ですね。私はまだ旧制中学生でした。そのあと、やがて青年になり、兵隊にとられて、見習士官になって戦車第一連隊という牡丹江にある連隊に赴任したのは、五年後の四四年。驚いたことに、そのときの戦車は、ノモンハンに出てさんざんやられた戦車（八九式中戦車）と本質的には違いませんでした。

クックス ノモンハン事件のときのタンクはジャンク、がらくただった。（笑い）

司馬 戎克^{ジャク}かあ。ともかく、日本人としてノモンハンを調べる場合、当時の日本陸軍のトップの頭の悪さと、国家保全への感覚のなさに、精神衛生が悪くなってしまう。（笑い）

十九世紀末までの日本陸軍は、立派に政治の従者でしたし、軍人それぞれが国家についてのすぐれたリアリズムを持っていました。それが、一九二六年ごろから一変する。陸軍は、だんだん

政治よりも上に出て超法的な権力を握り、軍人たちがリアリズムよりもドグマとイリュージョンに支配されるようになった。日本陸軍は、世界一強い。そして、国家を救うのは領土を広げることだ、ということです。陸軍による日本支配は三五年にほぼ完成する。それから二年後に、いわゆる日中戦争が始まって泥沼に陥り、その間に、ノモンハンという不用意な事件が起こります。クックス その時代、日本の軍部にとって、ソ連のコミニズムを抑止することが目的だったのか、それ以上の何かがあったのでしょうか。

司馬 いろいろです。たとえば、イギリス人が言い出したアウタルキー（自給経済主義）は、日本人に危機感的な刺激を与えました。日本もつくろうというので満洲国を独立させた。ところが、満洲国はカネにならなかった。

クックス 経済的理由だけでしょうか。

司馬 むろん、対ソ防衛線の円を広げるとか、また思想的信念というものもあったでしょう。その思想的信念は、勃興してくるナチズムからも、スターリニズムからも刺激される。スターリンは五カ年計画を一九二九年に始めて、重工業化するのです。ソ連軍は機械化される。それが日本の軍人をどこか刺激して、国家は計画経済であるべきだ、というふうになったのではないでしょう。それがナチ礼賛につながりました。

その二九年に、後にノモンハンに登場するボロ戦車の八九式中戦車ができた。僕らのときの主力は、三七年にできた九七式チハ車というやつ。実に平和な戦車で敵に対して害はありませんでした。（笑い）

クックスさんも書かれています、八九式も九七式チハ車も五七ミリ砲。短い砲身で曲射砲に

近く、弾が飛んでいくのが肉眼で見えます（笑い）。それでは困るというので、大戦の末期、チハ車のボディーに平射砲の四七ミリ砲をつけた。これはカノンで砲身は長いんですが、世界の戦車砲のサイズよりずっと小さい。

クックス 日本がそういう短砲身のタンクをつくったのは、日本の相手が、タンクを持たないような中国の軍隊であって、ソヴィエトのことまで考えていなかったからと思うのですが、それです。よろしいんですか。

司馬 私は、いまでもそう思っています。

クックス フランスでは、第二次大戦のときにも、タンクは歩兵と一緒に行けばいいと強調されていました。イギリスの場合は、それでも一九三〇年代に独立戦車部隊ができたんだそうです。

幻想を共有した日本軍

司馬 もうちょっとディテールにわたりますが、日本陸軍は歩兵協力用の戦車でありながら、滑稽なことに、この戦車でもってわれわれは対戦車戦を教育された。敵の戦車団が百両、こちらが百両、同じ実力、という想定のもとに訓練されました。

クックス どうして日本の百両のぼろタンクが、百両のファーストクラスのタンクと戦えるのでしょうか。

司馬 当時の陸軍の病気というべき空想癖です。私は、小隊長の教育を受けました。箱庭のようなものをつくりまして、敵が赤い玩具で、僕らはブルーの玩具で、この四台ずつがどうやるかと

いう戦術教育を受けました。そのとき、私は教官に対して質問を遠慮しました。能力が違うのに、どうして闘いができるのかは（笑い）。知っていても、全員が黙ってました。軍とともに空想を共有していたのです。（笑い）

クックス ボール紙の戦車ですね。それで、本当に戦おうと思ったのでしょうか。

司馬 明治の日本人にはなかったところです。昭和の軍の、日本の最高幹部の頭の中にあった空気の泡というべきもので、その泡をなくしてしまうと、昭和の時代、軍がつくった“国”が成り立ちません。

第二次大戦に入ったところですが、はじめて、九七式チハ車がビルマでアメリカのM3軽戦車と出合った。M3は背が高くて、お尻がちよつと盛り上がり、不格好でしたけども大変強い。砲は三七ミリ。こっち側は五七ミリの中戦車だったから、M3のほうが、馬鹿に強そうなのが来たと逃げていくてくれました。（笑い）

エンジン故障でM3の一台が残った。日本軍が砲弾テストすると、M3の砲弾は、こちらを全部豆腐のように貫きました。チハ車の砲弾は、野球のボールを投げつけたようにM3の装甲の前にぽんと落ちました。（笑い）

私の記憶では一九三七年、戦闘機が日本の円にして七万円のときに、戦車一台は三十五万円かかった。日本の経済力では、一台三十五万円のモデルチェンジをしていく能力はともありません。

クックス 日本は要するに肉薄攻撃。肉弾攻撃は安いから、だったのでしょいか。

司馬 空想を実現するには、兵の強さしかなかったのでしょうか。

クックスさんもお会いになった須見新一郎大佐は、ノモンハン事件の中途から千数百人を率いて応援に行かれた。徒步行軍で草原に着いたら、戦車が現れた。自分は命令しなかったのに、兵隊が飛びかかって火炎瓶——サイダー瓶につめたガソリン——を投げた。それには、須見さん自身がびっくりしたらしい。つまり、日本兵の賢さに。(笑い)

クックス 須見大佐は武官としてソヴィエトにいたんです。だから、彼はソヴィエト軍の機械化を知っていたんでしょう。

司馬 ソヴィエトでなく、須見大佐は黒河という国境の町の特務機関長でした。この須見さんの部下が、黒竜江対岸のブラゴベシチェンスクに潜入して一冊の本を須見さんに届けました。ソ連版陸軍画報といった宣伝雑誌で、そこに各種の戦車の写真がありました。それを須見さんは東京へ送りました。東京は黙殺しました。宣伝用じゃないか、と。日本の軍部はリアリズムを恐れていたような気がする。

その時代、陸軍に恐ソ病というレッテルがありました。そのようにいわれると、もう少将は中将にはなれない。だから、ノモンハンの戦場に放り込まれた師団長の小松原道太郎中将も、実はモスクワ駐在を経験して、ソ連をよく知っていたはずなんですけれど、黙っていたらしい。

クックス 当時、モスクワ大使館の駐在武官だった土井明夫大佐から聞いたところでは、モスクワではほとんど情報が取れなかった。土井さんは、要するに鳥籠にいた鳥だったといっています。司馬 情報が取れなかったといえ、日本側内部にもあります。淵田美津雄という真珠湾攻撃の飛行隊長がいます。私の母方と同じ故郷なものですから、晩年は親しくしました。彼は海軍のオフィサーパイロットたちと一緒に、ノモンハンの空中戦で日本軍が成功しているというので、見

学に行こうとして新^(注2)京まで行きました。ところが、日本陸軍のほうで、彼らをご馳走攻めにして、ついにノモンハンには飛ばせませんでした。(笑い)

先の須見さんから聞いた印象的な言葉は、自軍が「元龜・天正の武装だ」ということでした。織田信長のころの年号です。

クックス 二百人からの日本人をインタビューした中で、ノモンハン事件に立ち会って最も歴史というものを考えていたのは須見大佐でした。須見大佐は大変苦戦をして、いよいよ撤退しなればならない、そのときに、陸軍大学で習った歴史を一生懸命考えたというのですね。第一次大戦のときの歴史も考えた。過去の戦史をずうっと辿って、撤退の方法を考えた。こうした人は例外で、司馬さんも同感じゃないかと思いますが、日本の軍人は日本以外の戦史について、あまりにも知らないんじゃないか。

コップの中で巡回するドイツ的思考

司馬 戦史どころか、その当時の世界の陸軍についても、自国の海軍の限界についても知らなかった。

大正から昭和初年ごろ、イギリスの有名な女性の評論家が日本にいて、ハト派の政治家に好感を持たれていました。彼女が一九二五、六年ごろに帰るとき、彼らが横浜で送別会をしました。牧野伸顕もその中にいました。「日本をどう思いますか」と日本側が質問しますと、彼女は、「やがて軍部が、日本を支配して日本を滅ぼすでしょう」と答えたそうです。なぜかといえ、彼ら

は比較を知らない……。

クックス 選民意識でしょうか。

司馬 とは思いたくありませんけどね。

話を交えますが、面白い話があります。ノモンハンの戦場に現れて日本軍を苦しめたソ連の戦車はBT戦車でした。これは、アメリカ人がつくったらしい。

クックス クリステイ。

司馬 よく知ってるなあ(笑)。ユダヤ系アメリカ人ですが、まあプラモデルマニア。戦車のデザインをすることがホビーでした。この人が、BT戦車をつくり、アメリカの国防総省に売りつけようとした。だが、そのころのアメリカは、軍備にあまり関心がないうえに、陸軍はとびきり小さなものでした。そこで、玄関払い。これをソ連人が買い取った。

クックス ノモンハン事件のころ、アメリカの陸軍の戦力は、世界で二十番目だったそうです。ポルトガル、ギリシャ、スウェーデンと同じでした。

司馬 素晴らしい国だった。(笑)

クックス それが、アメリカの力を日本が過小評価したもとなっているんじゃないですか。

司馬 当時の日本陸軍は、なんでも過小評価しようとしてました。ソ連はスターリン粛清、千数百人の将校を含むインテリが殺された。ソ連には将校はほとんどいないか、能力の低い将校たちだけと、過大に喜びました。

クックス まったく同意見です。ただ、日本はすべてについて過小評価したけど、ドイツは除きました。

司馬 そうです（笑い）。日本のカデット養成の幼年学校、士官学校は、ドイツ語が中心でした。

クックス 駐在武官として日本の陸軍士官がロンドンやワシントンへ派遣されたときは、俺は出世しないんだという感じで行ったというんですね。（笑い）

司馬 ドイツ語をやることによつて、ドイツ的な思考法、考え方が身につく。ドイツ人は、コップの中で思考が旋回していて、あまり脇を見ません。

クックス それに関連するんでしょうが、日本の陸軍がひどくドイツに偏重して悪い結婚のような結果になったのは、どういう理由なのでしょう。ドイツ型思考というのは、日本人にものごくアピールするものがあつたのでしょうか。

司馬 そこが非常に難しい問題で、いま私立大学の独文科は学生がなくて困っている。そのぐらい人気がない。だから、日本人の体質に、ドイツ語、ドイツ的な思考法が適応していたとは思えないんです。

クックス 昭和天皇は大変にイギリスがお好きだつた。日本の海軍もイギリスの海軍を模範にした。現在に至れば、いまの皇太子も弟宮もイギリスに留学している。そういうイギリスに対する思いみたいなものが一方にありながら、ドイツとの密着性ができたのはどうしてなのでしょう。私は非常に混乱してしまいます。

司馬 日本は一八六八年、明治維新で近代化へ出発しました。そのときは陸軍も法律もフランス式でした。海軍は英国式を学ぼうとして、これは最後まで貫きました。

明治維新成立のときに、プロシア人を見た人は、ほとんどいなかったでしょう。プロシアの元スペシャル・サージェントが一人、クラークで大坂にいたそうですが、それと、陸軍の主計局に